

監督篇

映画文学人生論

- 051) 西鶴一代女 監督：溝口健二 原作：井原西鶴
052) 東京物語 監督：小津安二郎
053) 七人の侍 監督：黒澤明
054) うなぎ 監督：今村昌平 原作：吉村昭
055) キネマの天地 監督：山田洋次 原作：井上ひさし

映画作りとはまことに割の悪い仕事か

映画監督とは映画の映像作成を統括する責任者のことで、ディレクターとも呼ぶ。製作を担当する製作者はプロデューサーで、監督がプロデューサーを兼ねることもある。

映画作りとはまことに割の悪い仕事と今村昌平は『私の履歴書 映画は狂気の旅である』に書いているが、そんなはずはない。まことにやり甲斐のある仕事のように傍目には見える。

代表的な五人の監督の映画を選んでみた。

西鶴一代女	溝口健二
東京物語	小津安二郎
七人の侍	黒澤明
うなぎ	今村昌平
キネマの天地	山田洋次

「西鶴一代女」「東京物語」「七人の侍」は昭和二十年代後半、「うなぎ」は二十世紀末の平成八年（一九九七）年につくられた。

いずれも国際映画賞を受賞したり、内外の評論家に絶賛されて、評価が高い。「西鶴一代女」はヴェネツィア国際映画祭でサンマルコ銀獅子賞、「うなぎ」はカンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞した。「東京物語」と「七人の侍」は日本映画の歴代名作ランキングのベストワンないしベストツーと目されている。



監督篇

映画文学人生論

「キネマの天地」はそれほど高い評価は受けていないが、松竹大船撮影所五十周年記念作品であり、映画史を展望する参考として選んだ。

映画に夢と希望があった昭和八年の松竹蒲田撮影所や浅草の映画館を舞台にした人情喜劇で、若き日の斎藤寅次郎、島津保次郎、小津安二郎、清水宏らをモデルにした監督たちが登場している。

この映画の公開は映画不振期の昭和六十一年だが、「男はつらいよ」シリーズだけは好調を続けていた。寅さん役の渥美清が「キネマの天地」では旅回りの役者を引退して、映画女優の卵（有森也実）を養女として育てる男を演じている。隣家には博（前田吟）、さくら（倍賞千恵子）、満男（吉岡秀隆）の一家が住んでいるので、いわば、「男はつらいよ」の番外編だ。

「キネマの天地」の監督山田洋次は今村昌平よりも五歳年下だが、「男はつらいよ」シリーズなどが興行的にもヒットしているので、彼の場合は映画作りが割の悪い仕事とは思えない。

要するに映画監督には経済的なリスクがともない、つくった映画が赤字になれば割の悪い仕事になるのだろう。「七人の侍」は制作費が二・一億円と昭和二十九年にしては巨額だが、興行収入はそれを上まわった。その黒澤明でさえ晩年は資金難で映画作りに苦労したと伝えられている。

監督に花をもたせて映画祭